

飛来の始まり

日野町に飛来するオシドリ。その数は900羽を超えます。鳥たちは、この地でのんびりと羽を休め、まかれたドングリをついばむ。始まりは19年前、ある人が日野川にえさをまき始めたのがきっかけ。その人は、オシドリおじさん。こと、池岡幸三さん（舟場）。すべてはそこから始まりました。

19年前から続くえさまき地道な努力が実る

まちの中央を流れる日野川に、今年もたくさんのおシドリたちがやって来ました。

オシドリ飛来の始まりは、今から19年前にさかのぼります。え付けを始めたのは「オシドリおじさん」こと、池岡幸三さん（舟場）です。

当時、池岡さんは運送会社に勤務。材木を運ぶ途中に通る岡山県勝山町で、毎年同じ川の淵にやって来るオシドリを見かけていました。

「どうして同じ場所に」と疑問に思っていたある日、水中に沈んでいるドングリを潜って食べるオシドリの姿を見つけ「日野川にもドングリ

をまいたら集まるのでは。たくさんいたオシドリを呼び戻したい。美しい鳥を多くの人に見せてあげることができれば」と、え付けを思い付きました。

近くの日野川でも見かけていたオシドリ。かつては町内にも多くのオシドリがいましたが、その飛来数は徐々に減っていました。

仕事を終えた後や休日になる度に、近くの神社や山でドングリを拾い集め、休むことなく水辺にまき続けました。えさをまく場所も何度も変え、今の場所に定着しました。

ドングリ集めも楽ではありませんでした。ひとりで拾える量は限度があり、バケツ1

杯のドングリを集めるのに3時間もかかったこと。懐中電灯を手に暗闇の中で、寒さに凍えながら探したこともありました。

重ねることに増え、昨年は900羽を超えました。池岡さんは「ひとりで行っていたが、今は多くの人を支えてくれる。オシドリが結ん

今はひとりじゃない
多くの人が支えてくれる。

始めたからにはやめられない。夜中に探すため周囲から変な目で見られたこと。えさが足りず、家の米を持ち出して怒られたこともあったと、苦労した日々を池岡さんは話します。

そうした数々の努力が実り、20羽程だったオシドリも年を

でくれた縁を大切にしたい」と今までを振り返ります。

毎年秋になるとオシドリが飛来し、観察小屋には全国各地から多くの人が訪れるようになりました。そこには今に至るまで、数々の苦労を乗り越えてきた池岡さんの姿があります。



オシドリの大好物「ドングリ」全国各地から送られてくる



美しいオシドリの姿
みんなに見せてあげたいー。

池岡幸三

「たくさん食べろよ」19年間、休むことなくトングリをまき続ける池岡さん